

ヨハネの福音書前半のビデオでは、ヨハネがこの書を書いた目的を学びました。それはイエスがメシヤまた神の子であり、神の言葉と栄光の受肉であり、神とはどんな方かを示すためにこの世に来られたことを明らかにするためです。またこれを説明するための本書の前半の構成についても学びました。イエスはしるしとなる奇跡を行い、ご自分こそイスラエルの歴史が指し示してきたメシヤだと宣言されたのです。これが大論争を巻き起こし、ユダヤの指導者たちはイエスに敵対するようになりました。そしてこの敵はイエスが友人ラザロのために危険を犯した時頂点に達しました。彼をよみがえらせるためエルサレム近郊に行った時、イエスの運命は決まったのです。イエスを殺す計画が動き始めたところでヨハネの福音書は後半に入ります。

まずイエスがご自分の来るべき死に対し、弟子たちを備えるために過ごされた最後の夜と最後の言葉に焦点を当てています。この夜の晩餐でイエスは驚くべきことをしました。なんとしもべのようにひざまずき弟子たちの汚れた足を洗ったのです。当時の文化においてラビが弟子にそうすることなどありえませんでした。これは自己犠牲の愛という神の心の性質を表わすための自分の生涯を象徴するものだとイエスは言いました。またイエスがこれからしようとしていること、つまりしもべとなって世界の罪のために自分の命を捨てることの象徴でもありました。これは「わたしがあなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい」というイエスからの大切な戒めを教える行為です。惜しみなく愛することは、イエスに従う者のしるしであり、世界にイエスとはどんな方か、すなわち神とはどんな方かを示すことなのです。この後イエスは長い説教をし最後は祈りで締めくくります。それらは何度か繰り返されるてまによってまとめられています。例えばイエスは自分は去っていくと繰り返して弟子たちを悲しませますが、これは最善のことなのだと教えます。それによって助け主とも呼ばれる聖霊が与えられるからです。イエスは人間なので一度に一つの場所にしか得られません。イエスの霊である聖霊は、いつでもどこにでもいられます。聖霊の働きは多岐に渡るとイエスは言いました。前回の復習ですが、唯一の神は愛で結びついた父なる神と異なる神です。そして聖霊は人々をこの父とこの愛に導くために、人々の間に住まわれる愛の神だとイエスは言いました。だからイエスの弟子とはぶどうの樹につながる枝のように、神の愛に留まる人のことなのです。ヨハネはここで神の愛がどれ程人の人生に影響を及ぼし、その人を癒し作り変えることができるかを書いています。更に聖霊はイエスを信じる者が徹底的に仕える愛で人を愛しなさいというイエスの使命を担い、命令を実行するために必要な力を与えてくれます。イエスを信じる者の務めは真実を語ることでもあります。つまり人は自己中心的で罪深いことをしてしまうと指摘し、それでも神は世界を愛しているので、イエスによって救ってくださったと宣言することです。神は人があるべき姿に戻る道を開いてくださったのです。

そしてイエスは最後に、ユダヤの指導者たちがイエスを拒絶するので弟子たちも迫害されるだろうと予告しました。しかしご自分は既に世に打ち勝っているので、恐れなさいとも言いました。イエスが勝利とはどういう意味かここでははっきりしませんが、この書の最後のセクションでヨハネはイエスの勝利がどんなものか明らかにします。ユダヤの指導者たちはイエスを逮捕するために、イエスと弟子たちのもとへ兵士を差し向けました。イエスを探す兵士たちに向かってイエスが「わたしだ」と答えると、兵士たちは後ずさって倒れました。実はここにヨハネの文の巧みさがあります。この場面は、この書で二通りの方法で七回ずつ使われているフレーズの最後のもので、それらの箇所は皆、ヨハネがイエスについての革新的なメッセージを述べているのです。「わたしだ」という言葉はギリシャ語ではエゴーエイミーと言いますが、ヘブル語では出エジプト記3章でモーセに明かされた神の名前なのです。この言葉はイザヤ書にも何度も登場し、ヨハネは意図的にイエスがこの言葉を使って驚くべき宣言をなさる場面を七つ記しています。「わたしはいのちのパンである」「わたしは世の光である」「羊たちの門である」「良い羊飼である」「よみがえりである」「道であり真理でありいのちである」「一のぶどうの木である」。ヨハネはまた、イエスがこの神の名前をなぞりながら「わたしだ」とだけ言っている重要な場面を

含む七つの別のストーリーを組み入れています。イエスが逮捕されるこの場面は、これらすべての逆説的なクライマックスと言えます。イエスはご自分の命を投げ出した瞬間に、ご自分の神としての名前と力と勝利を明らかにされたからです。

この後イエスは神の子でありイスラエルの王であると名乗ったために裁判にかけられます。まずは大祭司の前で、次にローマ総督ピラトの前に連行されましたが、彼はイスラエルの王を名乗る者については厳しく対処すべき立場にいました。イエスはピラトに「わたしの王国はこの世からのものではない」と言いました。それはイエスは王であり彼の王国はこの世のためにあるが、その価値基準は著しく違って、力や偉大さに新しい意味を与えるもので、この世から出たものではないという意味です。これは神のご性質によって定義される価値基準であり、イエスが十字架によって表した逆転の王国を通してもたらされるのです。十字架とはこの世の真の王が罪と悪のために殺されることによって、それに打ち勝った場所なのです。イエスはこの自己犠牲の愛によってこの世に勝利を収めました。十字架刑の後、イエスの身体は墓に納められ大きな石で閉じられました。そして週の初めの日に、マリアと後に他の弟子達は、不思議なことに墓の石が動かされ中が空になっているのを見たのです。さらにマリアはイエスにばったり出会いました。彼は死からよみがえったのです。イエスのよみがえりはこの書における別の七を使ったパターンと結びつきます。カナの婚礼でイエスが水をワインに変えた時、ヨハネはこれがイエスの最初のしるしだと言いました。二つ目のしるしは4章にある病気の少年の癒しでした。この後からは順番は書かれていませんがしるしを数えていくと六つ目はイエスが命を危機にさらしてラザロを墓から呼び戻した奇跡だということに気付くでしょう。このようにして、これら全てのしるしは、ストーリーのクライマックスで起こる七つ目の最も偉大なしるしを指し示しているのです。つまりイエスご自身のよみがえりです。これはイエスが神の子であり、すべての命の源であり、愛を持って死に打ち勝った方であることを証明しています。空の墓の真の神イエスは弟子たちに会い、彼らに約束通り聖霊を与えることによって、父なる神から受けた任務を共に担うものとして任命しました。

それからこの書はイエスの弟子たちのその後を記したエピローグで終わります。一名の弟子たちは湖で漁をしていましたが何も獲れずにいました。その時岸辺にイエスが現れます。彼らは最初それがイエスだと分かりませんでした。イエスは網を船の反対側に投げるように、彼らがその通りにすると大量の魚が獲れました。その瞬間、弟子たちはイエスだと分かったのです。ヨハネはここでイエスの弟子であることの意義を教えています。イエスの弟子がこの世に最も貢献できるためには、自分の働きに焦点を当てず、ただイエスの声を聞いてそれに従うことです。そのときイエスが彼らの中で働いてくださるからです。この出来事の後イエスはペテロを教会のリーダーに任命し、彼もまた自分の命を投げ出すときが来るだろうと言いました。

この書の一番最後の部分は、著者であるイエスが愛された弟子のことを記しています。ペテロと違って彼の任務は境界を導くことではなく、その長い生涯の中で多くの人々がイエスを信じるように灯をすることでした。そしてメシヤであり神の子であるイエスについての驚くべきストーリーであるこの書を書くことによって彼はその任務を果たしたのです。これがヨハネの福音書です

【要約】

この文章は、イエスの最後の晩餐、弟子たちへの足の洗浄、イエスの自己犠牲の愛、そしてイエスの十字架での死と復活に焦点を当てています。イエスは自己犠牲の愛を通じて人々に神の性質を示し、聖霊の到来を予告しました。さらに、イエスは世界の勝利を通じて新しい王国を宣言し、弟子たちに使命を与えました。最後に、弟子たちはイエスのよみがえりと復活に出会い、その後の使命を受けました。ヨハネの書はこれらの出来事を通じて、イエスが神の子であ

り、愛と勝利の象徴であることを示しています。